

研究ノート

韓国の植民地都市と植民地建築物

李 炯喆*
松尾 晋一†

はじめに

終戦時、朝鮮半島には70万人余の日本人が居住していた。当時の韓国人口が2,500万人であった。朝鮮半島人口の3%が日本人であった。朝鮮王朝時代の釜山の草梁倭館を除けば、日本人の朝鮮半島進出は1876年朝鮮が開国した以降になり、日朝修好条規によって開港した釜山、元山、仁川をはじめ、次第に朝鮮半島のソウル、平壤、鎮南浦、清津、城津、木浦、群山、馬山などの開港場・開市に移住して日本人町を建設し、大きい所には領事館も設置した。

本稿においては、韓国の仁川、ソウル、木浦を中心に植民地都市の特徴と変化、及び今も現存する植民地建築物の利用について試論的な検討を試みる。

・植民地都市形成の類型と特徴

1. 都市形成の類型

橋谷弘は日本の植民地都市形成を以下のように3類型に分類した¹。

- ① 日本の植民地支配とともに全く新たに都市を形成する。
- ② 在来社会の伝統的都市の上に重なり合う植民地都市を形成する。

- ③ 既存の大都市の近郊に新市街を形成する。

その分類を朝鮮に適用すれば、①が釜山、元山、仁川、木浦、興南などで、②が京城、平壤、開城である。その通りであって、仁川と木浦は朝鮮人の殆ど住んでいない海岸沿いの土地に居留地を作り、京城こと今のソウルでは旧中心地の真ん中を流れる清溪川を境界にして北部の鐘路が朝鮮人の町であって、今も伝統的な韓国家屋が保存されている北村は朝鮮時代の権勢家たちの重要な居住地であった。清溪川の南部に当たる明治町と本町通と呼ばれた戦後の明洞と忠武路など南山の麓、ソウル駅辺りは日本人の町であった。元々、明治町と本町通は地勢の良くない地域であったが、日本人町になってからは京城でもっとも近代的な町に変貌した。平壤、開城、元山、興南は現在の北朝鮮の都市である。③は旧満州の奉天、長春（新京）、哈爾濱である。

2. 朝鮮における都市形成の特徴

朝鮮の日本人居留地は日本の行政権が強い専管居留地²であり、領事館、居留民団、商業会議所、金融機関、神社から遊郭まで立てられ、まるで外国の地に築かれたリトルジャパンであった。

*長崎県立大学国際社会学部教授

†長崎県立大学国際社会学部准教授

1923年朝鮮総督府が出版した『朝鮮における内地人』によれば、出身府県別戸口の順が山口県、福岡県、長崎県、広島県、熊本県、大分県、佐賀県になっていて、朝鮮と地理的に近い県から移住していることが分かる。初期日本人社会には一旗組と呼ばれる下層階級が少なくなく、官吏・軍人から芸妓・酌婦、日雇い稼ぎまで多数の雑業層の日本人が移住した³。

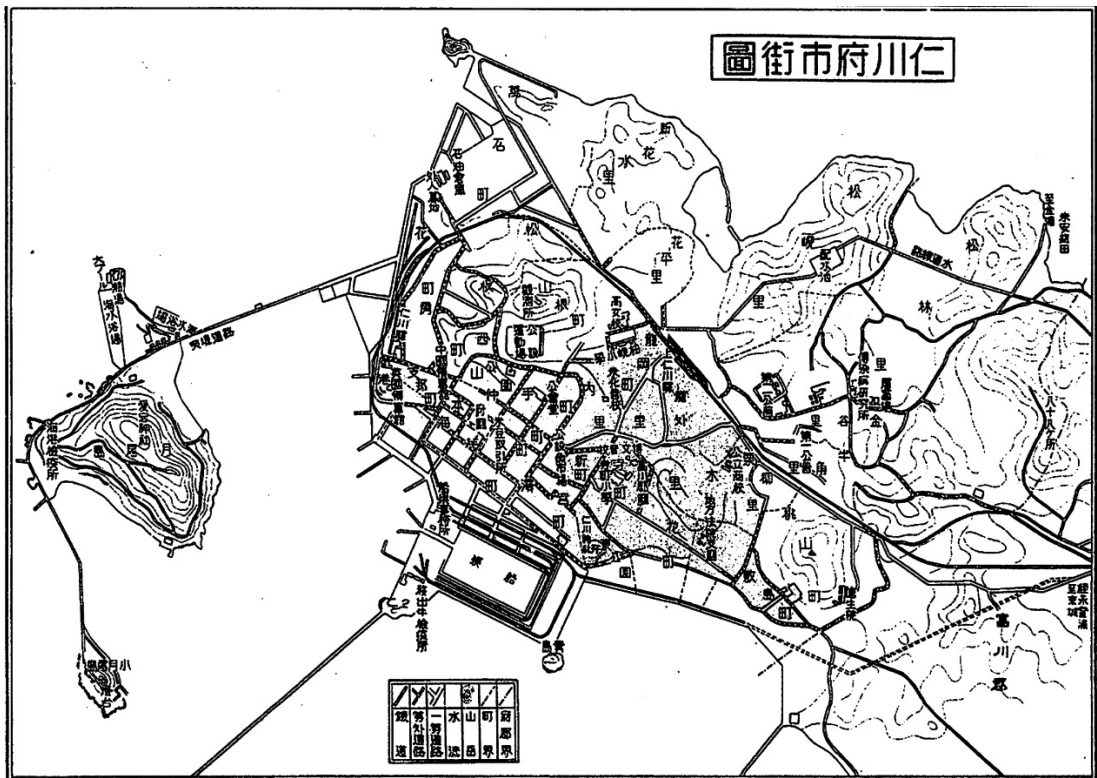
仁川の日本人町の形成

開港前の仁川の中心は日本人居留地から東に6キロ離れた内陸の文鶴（南区文鶴洞）にあって、そこに官衙と郷校があった。開港によって濟物浦と呼ばれた鄙びた漁村の近くに日本人居留地の本町、仲町、海岸町、宮町など新しい町

ができ、それを中心として新しい仁川が形成されたため、19世紀末から1970年代まで仁川の中心地（中区の官洞、松鶴洞、中央洞、新浦洞）となった。

1. 仁川の開港と花房義質

1883年に開港した仁川はソウルの西方30キロに位置したため、ソウルの関門となり、仁川港には日本の艦船の他、中国と西洋の艦船も入港したので、一瞬にして十数戸の鄙びた漁村から国際港へと変貌した。そのような経緯で、19世紀末から20世紀初めまでの東アジア関係史に仁川という地名が度々登場し、雲揚号事件の他、壬午軍乱、甲申政変、日清戦争の豊島海戦、日露戦争の仁川沖海戦の際にも仁川の地名が出る。仁川が開港したのは明治初期の外交官花房



義質の労力に負うところが大きい。実は、仁川の南方60キロの牙山湾（南陽湾）の方も候補地として上がったが、花房の詳密な調査後、仁川を開港候補地と決定した。花房が仁川に固執したのは政治的・地理的配慮からであった。また、仁川港の日本人居留地の敷地区画など、各般にわたって花房は重大な役割を果たした。日本の根強い交渉の末、1881年2月仁川港で米穀の運搬をしないという条件で開港に辿り着いた。朝鮮政府にしてみれば、ソウルの咽喉に当たる仁川はソウル防衛のためにも開港したくなく、開港すれば米穀の流出によってソウルの米価が暴騰して庶民（細民）らが擾乱を起こすおそれがあったため、花房も仁川に限る防穀令宣布に同意した⁴。

仁川の開港に努めた花房公使は1882年7月に発生した壬午事変の際には、暴徒化した朝鮮の軍民に追われ仁川まで脱出して、自分が執念深く開港を求めた済物浦⁵から小舟に乗ってとにかく海に出た。その後、漂流しているところを英国船に救助されて、長崎に戻った。歴史のアイロニーである。

2. 日本人町の形成

仁川が開港してから日本は7千坪の専管居留地を設定し、日本人居留地の他、中国人居留地と各国共同租界ができ、日本、中国、イギリスは領事館も置いた。外国人居留地は朝鮮人が殆ど住んでいなかった海岸沿いと丘の斜面地域であった。他の外国人より大人数の日本人は狭い居留地を拡張するため海を埋め立てて4千坪を超える埋立地をつくり、さらに住人が溢れると、各国共同租界（併合後の1912年に廃止）と朝鮮人住居地にも移住した。上の地図（中川浩一編集（1996年）『近代アジア・アフリカ都市地図集成』柏書房、2ページ）は1934年頃の仁

川である。結構、港湾施設も、鉄道も、道路も整備されていることが分かる。当然のことながら、港に近い日本人町は将棋盤のように道路が良く整備され、中心的な官公署と文化施設はその地域内に設けられ、他地域よりも一層発達して都市の中心地となった。地図の中に町の字がついた地域は主に日本人が多く住んでいた地域であり、里の字がついた地域は主に朝鮮人が住んでいたと受け止めていい。

3. 支那町と花房町

仁川の開港に尽力を尽くしたのは花房義質であって、併合後彼の功績を称えて支那町の北隣の地域を花房町（中区北城洞）と称した。支那町（善隣洞、現在は北城洞に編入）は元中国人居留地であったが、中国が日清戦争で敗北したため、大勢の中国人が帰国したにも関わらず、残った中国人もいて、併合後もそこに住み続けた。彼らは、韓国に現在する華僑の元祖に当たる人々であって、小料理店か、野菜栽培で生計を立てた。

4. 仁川港の変遷

10数棟の低い藁葺家と数隻の漁船が干潟の上に乗っかっていた閑散な漁村だった仁川の海辺に、開港後には堤防と棧橋が築かれ、沖合には外国の汽船が停泊する国際港に変貌した。地図上の港の一角にある船渠は日本によって10年掛りの工事の末、1918年に完工したもので、東洋唯一の閘門式のドックであった。海の干満の差が10メートルあったため大型船舶の接岸ができなかったため造ったもので、4千5百トンくらいの船舶3隻の接岸ができるようになり、荷役時間が短縮された。それでも大きい船舶は港の外港に停泊せざるを得なかったため、貨物輸送に不便が残っていた。1974年、内港全体をドック

ク化して月尾島付近に新しい閘門を作ったため、その姿が消え、漸く5万トン級の船舶の接岸ができるようになった。なお、その巨大なドックも機能を失いつつ、2015年には松島新都市の東に巨大なコンテナ専用港を建設した。

1920年代の産米増殖計画によって仁川港から大阪などに大量の米穀を移出したため、集荷された米穀を精米する精米業が発達した。そのため、戦後も仁川では精米業と製粉業が発達した。

・解放後の日本人町

終戦時、仁川の人口は25万人くらいで、日本人は2万人余いて、大概1946年3月まで引き上げたが、相変わらず旧日本人町は1970年代まで仁川の中心地であった。1980年代に旧仁川府庁舎にあった市役所とともに都市の主要機能を東に7キロ離れた九月地区に移転し、その周辺部に新しい町を築いたため、旧日本人町からも住民と富が流出した。それから町の衰退が始まったが、行政当局が町の観光化を図って、旧府庁舎（現在は中区庁舎）の周辺住宅の表を日本式に改修して日本人町の佇まいを見せ、旧中国人町の本格的なチャイナタウン化を図ったため、賑やかさを取り戻している。仁川市中区庁は旧外国人居留地の歴史的な情趣と植民地建築の活用を以って町の観光化を図って、町おこしをしている。

1．なぜ残したか

もし、韓国人が日本のすべてを憎悪したならば、屈辱的な植民地時代の遺産はすべてが破壊されて消滅したはずである。戦後、韓国人が敵産財産と敵産家屋と呼んだ植民地期の建築が現在もソウル、釜山、仁川、木浦、群山など韓国

の各地には残っている。植民地建築物が現存されて活用されたのは、使えたからであろう。なお、解放後の暫くの時期にはそれを上回る建築の建設ができなかったからであろう。1970年代まで学校、病院、公共施設の建物、民間住宅など、植民地建築物が大勢残っていたが、その後老朽化などの理由で撤去された。それでも現在も活用、保存されているものもあって、使用できる近代式の建築物はそのまま使用するか、または近代文化財として保存され、近代博物館または展示館として活用されている。ソウルを除けば、釜山、仁川、木浦などに近代文化財として保存している植民地建築物は東洋拓殖会社の支店、領事館、銀行などの金融機関、郵便局などの建物である。その建物は殆どが西洋式の建築物であって、日本の象徴でもある神社は殆どが日本人の手によって取り壊されたうえ、焼却された。住宅を除けば日本式の建物は殆どが消滅して、群山に日本の寺が現存しているくらいである。

橋谷弘によれば、西洋式の建築物は植民地支配と無関係ではない。支配者の優位を際立たせ、被支配者を威圧することを意識して建てられたからである。しかし、植民地期の日本人による建築も、朝鮮人による建築も、解放後の韓国による建築も基本的には洋式建築であったため、植民地建築の歴史に目をつむれば、新たな近代的な景観の中に埋没するようになったからである⁶。

2．現存する旧日本家屋

・活用・保存 ソウルではソウル駅、韓国銀行、新世界デパート、仁川では中区庁舎、港洞郵便局、第一銀行・第18銀行・安田銀行の建物、木浦では日本領事館、東洋

拓殖会社支店などがある。それらの建物は今も使用されたり、博物館・展示館として保存されている。

- ・日本家屋 日本人が引揚げてから70年以上になるため、住宅の表が改修され、住宅内部の改築のせいもあって当時の原型をそのまま保っている住宅は現存していないであろう。しかし、旧日本家屋の面影は漂っていて、仁川の旧日本人町には住宅と長屋のような集合住宅が残っている。釜山では旧邸宅と料亭を保存・公開し、木浦では飲食店として活用している。
- ・その将来 仁川の場合、旧日本人町は老朽化のため何時かは再開発になるであろう。そのため、町全体を保存することは難しいが、その中の保存状態の良い家屋などは展示館または資料館として改修して後世に残しても良いであろう。日本人町が存在したということも歴史の一駒であるからである。

・木浦の日本人町の形成

1．木浦の開港

1889年ごろ日本は朝鮮へ大同江と全羅道沿岸に開港地を求めた。しかし、具体化するのには日清戦争後のことであった。日清戦争後、日本は清と日清講和条約を結び、その中で日本は清に朝鮮の独立を認めさせた。朝鮮への影響力を拡大させたい日本は、その後、朝鮮との間で特命

全權大使大鳥圭介と外部大臣金允植が「暫定合同條款」(1894年8月20日)に調印した。日本は京釜鉄道と京仁鉄道の敷設権を手に入れるなどしたが、日朝関係を親密にして貿易を奨励することを目的として全羅道の沿岸で一港開港することがこれで約束された。これにより慶尚道、全羅道の実地調査が行われ、木浦が最適であることが報告された。

栄山江の河口に位置する木浦は、穀倉地帯である羅州平野から米や綿花を集積し、直接日本へ輸送することができる利点が日本にあった。しかしイギリスなどの列強の干渉などあり、すぐに木浦が開港するには至らなかった。日本側は朝鮮との開港交渉をイギリスなどの協力を得て進め、最終的には1897年7月3日外部大臣代理から閣議に提案され、木浦と鎮南浦の同年10月1日開港が議決された。そして、朝鮮国王に上奏して裁可を得た。この経緯からもわかるように、木浦の開港は条約によるものではなく、朝鮮の自主的な判断による形式がとられたが、日本の独占的地位を排除するために欧米列強にも同時に開港することで決着をみたのであった。そのために木浦は、共同租界とされた。

木浦の開港が決まると、日本は駐在日本国領事として久水三郎を任命して領事館を設置した。領事館を置いたのは日本のみで、第2次日韓協約後(1905年)、領事館は廃止され、建物は理事庁庁舎、木浦府庁舎として利用されていた。

2．木浦の日本人と居留地の形成

開港して間もない1897年10月木浦の日本人は、16戸83人であった。それが翌年7月末206戸941人まで増加している(①長崎263②山口224③大分74④福岡46④佐賀46④熊本46⑦広島35⑧大阪31⑨東京29⑩鹿児島20)。同年11月末には、

住屋が242戸'に増加しているのので、開港直後日本人の流入が急増したことがわかる。

その後、1924年には、1445世帯、7368人(①山口1234②長崎887③福岡677④広島444⑤熊本342⑥大分294⑦島根286⑧岡山252)にまで増加。1938年1,839世帯、8,551人、1939年には1,868世帯、8,587人、1942年8,182人となっている⁸。

この時期も出身地上位は、山口・長崎・福岡の三県である。木浦は輸出超過の貿易港で、対外貿易は日本相手が大部分であり、大阪、神戸、名古屋港との取引量が多かった。しかし、この点と木浦在住者の出身地とは関係ないことがわかる。

ところで、こうした日本人は居留地に住居したが、居留地の三分の一は海面、沼地であり埋め立てによって確保された土地だった。居留地の地区割り変更はオランダ人スターデンによって策定されるも、三次にわたって変更され、その面積は1912年の朝鮮にある居留地土地面積と比較すると木浦が最も広がった⁹。その中には当初、日本のほかにロシア、イギリスの領事館敷地が確保されたが、日本の場合、領事館のあった大和町を中心に日本人街が形成された。その後、1914年10月1日居留地制度が撤廃され、周辺集落を含む形で木浦府となっていくが、木浦の特徴として日本本土出身者による独占的居留地形成がみられたという¹⁰。

3. 戦前期建築物の遺構とその活用

1995年の内藤和彦による木浦の調査によると、対象となった日本式建築物3,370戸のうち767戸が日本式建築と確認されている¹¹。現在では数が減るも地方として開発が遅れていることもあり改築などによって他の町よりも多く現存する。ただ、注意しておきたいのは戦前のままというものの数は少なく、韓国の一般的な都市



【写真1】(2015年松尾撮影)



【写真2】旧湖南銀行木浦支店(2015年松尾撮影)

景観に同化するかたちで現存する数の方が多い【写真1】¹²。こうした点が顕著にみられる住宅については、砂川晴彦など「日本統治期の韓国・木浦駅周辺地域における日式住宅の成立と都市形成に関する調査研究」¹³を参照されたい。

また公的な建造物も現存していて、西洋式建築に日本式建築を取り入れた折衷様式の湖南銀行木浦支店【写真2】や東本願寺別院、木浦公立小学校などが残る。一般公開されていないものもあるが、なかでも旧木浦府庁舎は韓国独立後も木浦市庁舎として利用され、その後、図書館、現在では木浦近代歴史館1館となって木浦

の歴史を学ぶことができるようになっている。
また、木浦近代歴史館2館はルネサンス様式の旧東洋拓殖株式会社木浦支店であり、写真資料が展示されていてこちらも観光資源としての活用されている。

・なぜ壊したか：朝鮮総督府庁舎の撤去

民主化を実現した1993年に成立した金泳三文民政府は正しい歴史の確立のため、戦後は中央庁という名称で長らく韓国政府の中央庁舎として使われた旧朝鮮総督府庁舎を1995年に撤去した。屈辱的な歴史の象徴とも言われたが、筆者も中央博物館時代の旧総督府庁舎を見学したことがある。1926年完工された実に美しい4階建ての西洋式の建物であって、中央に大きな吹き抜け、天井のガラスドームとその真下の1階の床には彩りの丸い模様があったことを覚えている。なぜ撤去せねばならなかったのか、単なる反日主義のためではない。朝鮮総督府は、景福宮正門の光化門を景福宮東門の方に移築・保存（朝鮮戦争時に消失・現在は元の位置に復元）してから総督府庁舎を建築した。勤政殿や慶会楼などの主な建物は残したが、宮殿の相当な部分が破壊されたうえ、総督府庁舎に隠れたため景福宮が見えなくなった¹⁴。もし、総督府が宮殿を損なわずに他の場所に庁舎を建てられたならば、今も保存されているであろう。

総督府庁舎の有する歴史的かつ建築的な価値を鑑みれば、非常に残念なことではあるが、現在の光化門広場に立つと、光化門、その後ろの景福宮、大統領府青瓦台の屋根とその裏に聳えている岩山北岳山（342m）の美しい情景が一目に入る。

終わりに

韓国の流行歌に木浦に因んだ「木浦の涙」（1935年）と仁川に因んだ「離別の仁川港」（1954年）があって、年配の韓国人ならよく知っている名曲である。木浦の涙の歌詞の中の三鶴島は、今はその周辺が埋め立てられて陸の島になってしまい、離別の仁川港の中の仁川港の痕跡は今も跡形もなく、遊園地として有名だった沖合の芍薬島は、人通りが途絶えた孤島になっている。韓国内の旧日本人町も建築物も何時かは時代の風化とともに時代の中に埋もれるであろうが、時代も歴史自体を埋没することはできないので、その歴史を保存・記憶できるような事業も必要であろう。

注

1. 橋谷弘（2004年）『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、11 13ページ。
2. 日本居留地の特徴については、橋谷弘「釜山・仁川の形成」大江志乃夫他編（2001年）『近代日本と植民地3・植民地化と産業化』岩波書店、245 246ページを参照。
3. 橋谷、前掲『帝国日本と植民地都市』71 - 72ページ。
4. 仁川の開港経緯については、仁川府編（1933年）『仁川府史』100 115ページを参照。
5. 済物浦とは仁川の旧称であり、開港前の仁川港当たりの漁村を指す地名であって、物量を集積して置く場所の意味である。壬午事変後、日本と朝鮮との間で済物浦条約が結ばれた。
6. 橋谷、前掲『帝国日本と植民地都市』112 135ページを参照。
7. 河村一夫「明治三十一年十一月の韓国木浦港日本居留民営業表」『日本歴史』367号、1978年。
8. 山元貴継「日本統治時代における朝鮮半島・木浦府周辺の空間的変容 地籍資料の分析を中心に」『人文地理』第55巻第4号、2003年。古川昭『木浦開港史』ふるかわ海事事務所、2009年。永野慎一郎「韓国木浦地方の近代化過程に関する一考察～日本との関係を中心に～（上）」『大東文化大学経済論集』97 3、2012。同「韓国木浦地方の近代化過程に関する一考察～日本との関係を中心に～（下）」『大東文化大学経済論集』99 4、2013年。

9. 延圭憲、伊藤裕久「韓国・木浦各国居留地における地区割計画の変遷と競売過程に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』Vol.80 No.713、2015年。
10. 山元、前掲「日本統治時代における朝鮮半島・木浦府周辺の空間的変容 地籍資料の分析を中心に」
11. 内藤和彦「韓国・木浦市内旧日本居留地に残存している日本式建築の現況」『日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』1996年。
12. 須山聡・鄭美愛「韓国における植民地都市景観の無国籍性 群山・木浦市を中心に」『駒澤大学文学部研究紀要』66、2008年。
13. 『日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』2014年。
14. 「朝鮮総督府」『ウィキペディア』(<https://ja.wikipedia.org/wiki>、2016.4.23)。

本研究ノートは、平成27年度 学長裁量研究費「朝鮮における日本の植民地支配」の研究成果の一部である。